

第九回（11月21日）復習と解説

前回、主に扱われた『ペリクリーズ』（*Pericles*）に説明をつけ加えることにいたしましょう。この劇が出版組合登録簿に記載されたのは、1608年5月20日。翌1609年に出版されたのが四つ折り本（Q1）でございます。このQ1はテキストの乱れが多く、内容にも矛盾が見られますが、1635年までに5回も版を重ねています。これは、劇の人気の高さを証明するものと言えるでしょう。一方、1608年に、劇作家でありパンフレット作家のジョージ・ウィルキンズ（George Wilkins, c.1576-1618）が散文物語 *The Painful Adventures of Pericles* を出版しました。この作品を *Pericles* の上演記録と同等とみなし、乱れの多いQ1よりも重視する立場を取る Norton 版の編纂者と、Q1を尊重する New Cambridge 版の編纂者が存在し、その他のテキスト編纂者は両者の中間的な立場を取っています。

神父様をご指摘になりましたように、シェイクスピア戯曲を36篇収めた1623年出版の第一・二つ折り本に『ペリクリーズ』は収められておりません。シェイクスピアの同僚たちがシェイクスピアの作品を認識できないはずがないので、*Pericles* を戯曲集に含めなかった理由について、さまざまな憶測が生じました。一番有力な説は、『ペリクリーズ』には他の作家の手が入りすぎているので、シェイクスピア戯曲集から排除したという説でございます。

『ペリクリーズ』が二つ折り本の戯曲集の収められたのは、1664年出版の第三・二つ折り本第二刷からでございます。*Pericles* にシェイクスピアの手が、どの程度入っていたかの議論がある一方で、誰の手が入っているかが、作品自体が傑作ならば良いではないかという考え方もございます。なお、現在、多くの研究者は、かつて有力だった George Wilkins 共作説を否定しています。

なお、*Pericles* は作者の問題があったためか、舞台ではあまり上演されてはおりませんでした。ところが20世紀に入ってから、*Pericles* は舞台に華々しく復活し、優れた上演で人気を博しています。

神父様は、最初に、これまでの連続講座を振り返られ、シェイクスピア劇全体からシェイクスピア劇を読み解くために、*The Pattern of Shakespeare's Carpet* を執筆なさるまでの経緯をお話しになるところから、第九回の講座を始められました。

シェイクスピアが所属した劇団の仕事仲間であった **John Heminges (1556-1630)**と **Henry Condell (1576-1627)**が編纂した「シェイクスピア戯曲集」(F1)は、劇、歴史劇、悲劇の順に劇を配置しています。喜劇の部分の冒頭には『テンペスト』を、喜劇の最後には『冬物語』を、悲劇の終わりに『シンベリン』を配置しました。歴史劇の『ヘンリー六世』、『ジョン王』、『ヘンリー八世』は合作ですが収められている一方で、『ペリクリーズ』は入っていません。こうした理由から、神父様はF1を信用できないと断言なさいました。劇は、喜劇、悲劇、悲喜劇(ロマンス劇)の順序が正しく、この順序に従わなければ、シェイクスピアが劇に描いた模様("pattern")を読み解くことはできないのだと強調されました。

"pattern"という表現に関しては、**T.S.エリオット (T. S. Eliot, 1888-1965)**が、1929年のダンテの批評において“**pattern in the carpet**”という言葉を使っていることを指摘なさいました。エリオットは、シェイクスピアの全ての劇を読み解くと違いが判ると述べてはいるのですが、自分で模様を見つけることはなく、むしろ自分の詩劇に模様を取り入れることに関心を寄せ、自分のイメージを強調しているとのお話でした。

エリオットは、キリスト教改宗前は「荒地」、改宗後は「庭」、「パラダイス」のイメージを使っています。彼は、批評家の**ジョージ・ウィルソン・ナイト (George Wilson Knight, 1897-1985)**と親しく、ナイトはシェイクスピアのイメージラリーを強調しました。さらに、**キャロライン・スパージョン (Caroline Spurgeon, 1869-1942)**が *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us* (1935)において、シェイクスピアの作品を“**imagery**”によって解き明かそうとしたため、当時、この手法が流行しました。けれども、“**imagery**”でシェイクスピアの謎を解き明かすことは不可能だと神父様は説明なさいました。

“**carpet**”に関しては、**ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916)**が、1896年に発表した短編小説“**The Figure in the Carpet**”の中で、ペルシヤ絨毯の模様を解き明かすのが批評家の仕事だと記しています。このタイトルを *The Idea of a Theater* (1949)の著書で著名な演劇理論家の**フランシス・ファーガソン (Francis Fergusson, 1904-1986)**が、シェイクスピアやアメリカの劇作家**ユージン・オニール (Eugene O'Neill, 1888-1953)**を *Shakespeare: The Pattern in His Carpet* (1958) で取り上げています。

シェイクスピアの全ての劇を60年間研究なさってこられた神父様は、シェイクスピアの劇を絨毯の模様にも例えられました。絨毯の模様を読み解くには、シ

シェイクスピアの劇全体を俯瞰しなければ劇作家の意図を探ることはできない、さらに、その目的を達するには、メタ・ドラマの手法を用いる必要があると強調されました。

シェイクスピア劇には三つの層があることを再度説明されました。第一層の一般的な理解の層。表層に含まれるイメージリー研究ではシェイクスピアの薄っぺらな理解しかできません。第二層は宗教的な層。カトリック、イングランド国教会、ピューリタンに共通する聖書の意味を読み解く層でございます。その奥に存在するのが第三層で、カトリックのレキュザントのインスピレーションを理解する層でございます。この層の意味を読み解いてこそ、シェイクスピア劇が理解できると力説されました。

神父様は、本講座の講義を総括なさるようにシェイクスピアの劇の流れと各時期の特徴や意味を劇の深層に触れながら丁寧に解説くださいました。

シェイクスピアの劇は三つのジャンル、喜劇、悲劇、悲喜劇に分かれていますが、この三つのジャンルは、ロザリオの祈りに呼応していると指摘されました。ロザリオの祈りは、聖母マリアへの祈りの一連は、主の祈り一回、聖母マリアへの祈り **10** 回、栄唱 **1** 回からなり、五連で一環となります。各環は、喜びの玄義、苦しみの玄義、栄光の玄義の三環、聖母マリアへの祈りを **150** 回唱えます。

修道士はラテン語で **150** の詩編を唱えましたが、信者は詩編の代わりにロザリオの祈りを唱えていました。イエズス会士ヘンリー・ガーネット神父は『ロザリオの会』という冊子を出版しています。司祭のミサに与ることが難しかったイングランドのレキュザントは、「ロザリオの会」で聖母マリアのロザリオの祈りを唱えることを勧められていました。神父様は、シェイクスピアが隠れカトリックで、「ロザリオの会」に入っていたのではないかとお考えです。

「ロザリオの祈り」では聖母マリアへの祈りを **150** 回唱えます。シェイクスピアのソネット集は **154** 編を収めていますが、**126** は **12** 行詩、**145** は本当のソネットではないと解釈され、最後の **2** つのソネットもソネットの流れから外れています。これら **4** 編を除くと、ソネットの数は **150** 編になり、ロザリオの聖母マリアへの祈りの数と一致すると指摘されました。

第九回に神父様に取り上げられたのは、**1608** 年から **1611** 年に書かれたロマンス劇（悲喜劇）でございます。ジェイムズ朝の時代、シェイクスピア劇には理想的な四人の女主人公『オセロ』のデズデモーナ、『リア王』のコーディリア、『尺には尺を』のイザベラ、『終わりよければすべてよし』のヘレナが登

場します。その後、二、三年に書かれた『マクベス』、『アントニーとクレオパトラ』、『コリオレーナス』には理想的な女性は登場せず、『アテネのタイモン』には女性すら登場しません。ところが、ロマンス語で書かれた数奇な物語が語源の晩年のロマンス劇に再び聖母マリア的な女主人公が登場します。

ロマンス劇では、父親と娘の關係に焦点が絞られ、四人の理想的な女主人公の名前には聖母マリアが暗示されているのです。マリーナは「海の星」(“**Stella Maris**”) で聖母マリアを、パーディタは“**Perdita Gratia**”、ハーマイオニを否定したリオンティーズの失った恩寵、ミランダはロレトの連禱のなかで用いられる聖母マリアの敬称“**Mater Admirabilis, Virgo Veneranda**”に由来しています。

『ペリクリーズ』はジョージ・ウィルキンズの最初の二幕を受け、シェイクスピアが劇を完成したと神父様は解釈なさいました。シェイクスピアの手による第三幕で、主人公ペリクリーズは海上で嵐に遭遇します。妻タイーサはマリーナを出産後、死亡し、遺体は密封した棺に入れられて海に投げ込まれます。家族は離散の憂き目にあうものの、エフェソスの女神ダイアナのとりなしで、ペリクリーズは生き別れた娘マリーナとミティリーニで再会するばかりか、エフェソスで死んだはずの妻と再会します。

レジュメの *Pericles* の第五幕第一場の台詞 “**Oh, Helicanus, strike me, honored sir...Thou that begett’st him that did thee beget,/ Thou that wast born at sea.**” は、聖歌 “**Alma Redemptoris Mater**” (「救い主の御母」 “**Dear Mother of Our Redeemer**”) を、シェイクスピアが見事に翻訳して用いていると指摘されました。

1606年の法令により、神の名前の使用が禁止された結果、シェイクスピアは新プラトン主義的な類似を利用して、聖母マリアを純潔の女神ダイアナに、父なる神をジュピターに、神の子キリストをアポロに言い換えています。『ペリクリーズ』の最終場面はエフェソス舞台ですが、このエフェソスは聖母マリアと関係の深い土地です。431年のエフェソス公会議 (“**the Council of Ephesus**”) は、「受肉した神の子の母、聖母マリア」の称号を認めた重要な公会議だったので。

第二部

質問1：第五幕第三場で、エドマンドが死に際に少し良いことをしておきたいとエドマンドが改心したことへの神父様のコメントは？というご質問でござい

ました。

お答え：ブリトン軍の指揮官となったエドモンドは利己的な人間でしたが、最後の最後になって、リア王とコーディアリアを助けようとします。ところが、現実には手遅れでした。『ハムレット』においても、毒を塗った剣でハムレット殺害を狙ったレアーティーズが、死に臨んで改心してハムレットに許しを請い、互いに許し合います。このように、シェイクスピアは悪人が改心する類似した場面を描いているとご説明くださいました。

最後に、『ペリクリーズ』の第三幕一場のペリクリーズの台詞“**Thou god of this great vast rebuke these surges,**”次に第五幕一場の“**O Helicanus, strike me, honored sir,**”を神父様に倣って朗読し、第九回を終了いたしました。